

(書籍データ) 江藤淳著 『海舟余波 - わが読史余滴』

発行：文芸春秋社

発行年月：1984年07月

ISBNコード：4-16-736601-

0

販売価格：619円(税抜)

内容：徳川時代の終焉を誰よりも的確に予見しなお何ものかを守り通そうとした勝海舟。なんのためにその徒労に全力を傾け情熱を燃やしたのか。その政治的人間像をさぐる。

(「国際人流」寄稿)

タイトル：「人生、仕上げの時期、締めくくりの時」

NPO法人生涯学習・知の市庭 東島 信明

1. 人と歴史

勝海舟という、誰もが知っている、しかもイメージの定着した人物を敢えて描こうとした動機を、著者の江藤淳は、以下のように記している。いわば海舟を描くための環境設定である。

「『歴史』は、人が主体的に創り上げるものだという考え方があり、その『歴史』の過程に、人が参画することにより『歴史』を変えたり飛躍させたりする事が出来る。おそらく『未来』と『終末』を目指す『歴史』である。『未来』の建設と『終末』の訪れとをくり返しながら『歴史』は続き、『歴史』は完結しない。『なにかのために生きている』と信じながら、では、『なんのために生きているのか』と、人は自問自答した場合、どのように答えを予知し、次の行動を予定することが出来るだろうか。仮に、人間が『歴史』の過程に参画するために生きているといわれても、人はある日死ぬ。時代は崩れ、人は死んで行く、それが『歴史』だといえるような気がしている。では、完結しない『歴史』のなかで、次々と完結して行く人の生というものはなんだろうか、どうして人生が完結するように、『歴史』が完結してはいけないのかと考えるに到り、人を超える『歴史』の重みが現れる。このような環境を設定した上で、政治的人間として勝海舟のものがたりを始めてゆく。」(プロローグより抜粋)。

2. 勝海舟の軌跡と課題

本編は、安政七年(1860)、勝海舟が癩癩を起こしながら、日米通商航海条約批准使節団が乗り組んだ蒸気軍艦・威臨丸の艦長として、上司の海軍長官・木村摂津守等と共に米国に渡ったところから始まる。癩癩の因は、「身分格式」の秩序(歴史の終末に当たる)と操艦の規律(歴史の建設に当たる)との間の相互矛盾にあった。

「身分格式」の秩序もそれ自体が悪いという根拠は少ない。とって、新しい時代に有効性を失いつつあるという事実は歴然としたものの、新しい時代が「身分格式」の時代よりも良い時代になる根拠もない。米国には新しい時代に即した社会体制と異質な秩序がある。それがどうして「あり得べき日本国家」の秩序になりうるのか。威臨丸渡航から始まる歴史の終末・崩壊と歴史の未来・建設に立ち会わねばならぬ海舟の人生は「身分格式の秩序と操艦の規律」という言葉でスタートする。

3．なぜ ビジネス書として読むと面白いのか

立ち会った徳川家の崩壊と時代の変革に対峙して、人の命は何れ完結することと、徳川の時代を引き継ぐ新しい時代の到来(歴史を完結させない)のために「リスクを避くるに処あらん」といい、政治的人間として生きようとした海舟の生き様、その苦行の背後にある使命感、そして使命を達成するために考えだしたさまざまな手段などを、格好のビジネス書として読んだ。想いの残る本は、私の場合、必ず古本屋で見つかる、「海舟余波」も池袋の古本市で見つけた一遍である。

なぜ海舟が、さまざまな崩壊にたちあわなければならないのか。それは歴史の偶然とってしまえばそれで済むが、崩壊は外部ばかりでなく、彼の心身にも起こるはずである。この苦悩をどのようにして耐える事が出来るのか、この本は、その政治的人間の真価を描き出すことに成功している。

海舟の周囲ですべてが崩壊し始めるのは慶応三年(1867)、すなわち王政復古、明治維新の前年である。彼が45歳の時で、以降、生涯の終わり(77歳)には正二位勲一等伯爵という高位高官にのぼる。では彼の「使命の始まり」と「使命の終わり」とは、一体どのようなものであったのだろうか

3．(1)「使命の始まり」～人生仕上げの時期

王政復古の号令の翌年、明治維新(1868)から始まった徳川家の崩壊の中で、海舟(この時46歳)が全霊を上げて努力したものは、主君慶喜の助命であった。慶喜助命、江戸城開城、幕臣の生活保障と三つの柱をつくり、西郷達と渡り合うのだが、主君慶喜が朝敵の汚名を着せられての逝去は、それこそ幕臣である海舟の耐えられることではない。あらゆる手段を講じて阻止しなくてはならず、江戸市中のゲリラ戦、慶喜の英国亡命などを想定しながら、慶喜助命の道を拓く。海舟は、当時では珍しく、市場経済のあり方を本能的に理解していた人物であったと思う。

西郷らの官軍は、既に駿河に到着、その先発隊は江戸市中に入り込んでいる。英国公使パークスは横浜全域を列国の共同管理にする非常措置を敷いている。列国のリーダーは、通訳アーネスト・サトウとパークスの線で、英国は安定した市場である日本を確保する事が重要と考えている。この目的を達成するには、内乱収束と統一政権が出来る事が条件であった。一方、列国は内乱増幅が目的でなく、これからの利益に繋がる日本市場に魅力を感じていることを海舟は理解していたと思う。だからパークスを利用し利用されて、和平と慶喜助命とをパークスに仲介させた。その手段として江戸城開城という切り札を使っている。このあたりをビジネス書として読むと、歴史を創る人とビジネスを興す人の共通の課題が見えて興味深い。

しかし、江戸城開城を果たしたものの、慶喜の水戸蟄居、奥羽列藩同盟・彰義隊との関与を恐れ、駿河で隠居の身となり、江戸城への復帰は果たせず、朝敵の名が残った。海舟としては、この汚名を晴らす事が「使命のおわり」への始まりとなった。

3．(2)「使命の終わり」～人生締め上げの時

海舟は、朝に仕え、高位高官に進んでのぼったのは、慶喜と朝廷との和解と旧幕臣が謀反を起こすことを戒めること、また旧幕臣の生活を保障する意味で、明治政権の要職に付け、有能な彼らの生活を少しでも助けることでもあった。新政権に寄与した旧幕臣の評価だが、近代化の基本政策を立案担当し現場で、実行・指揮した人々がいたことは忘れてはいけない。そして、遂に、明治31年3月2日、旧徳川慶喜と皇室

との和解の儀がやって来た。

慶喜は、朝敵と呼び、生命を要求した天皇に深々と頭を下げた、時に慶喜60歳、明治天皇45歳。

この和解の儀の翌年、明治32年(1899)に海舟は逝去する。「使命の終わり」を知った77歳の大往生であった。

4 . 現在の私

かつては、ビジネスの書として本編を読んだが、60歳を過ぎて再び読み返して見るとプロローグにある、「完結しない『歴史』と完結する人の生」のさわりが気になる、また、エピローグにある、慶喜と皇室との和解の儀まで漕ぎ付けるまでやり通した政治的人間である海舟の生き様と重ねて、市井の人である私にも、なにか「使命のおわり」は与えられないのかと思う。いや、与えられなくても、こちらで創ろう。

政治的人間といえ、海舟と同じく、「勝ちあがり、成功しなければならない」という命題を負って、自らを叱咤激励し日々努力した若き頃の自分を思い出す。サラリーマンの世界では、一人だけが挫折を知らずに生き残る。何時か、自分の限界を知り、無理やりでも、自分の居所がここにしかないことを自分に知らせしめ、自分を納得させる。納得しがたいことも含め、自分の中に納める。ごちゃごちゃしたことを言わない様にしようと思決心する。さて、腹に収めたものを出さないために、なにをしたら良いのだろうか。

60歳を超えたのだから、人生の仕上げの時期として、自分を変える事が出来る、今までと違う情報の中に入ろう。何か社会の役に立ち、心から楽しめるものをして、と考え、協力をして下さった方々の意見を集約して生まれたのが、『NPO法人 生涯学習 知の市庭』である。

『NPO法人 生涯学習 知の市庭』の事業コンセプトは、

- (1)講演録を「もったいない」から、リサイクルして、知の市庭HPに掲載しよう、そのために
- (2)講演をした方に著作権があるので、HPに掲載をさせて頂く著作権利用許諾を認めて頂こう
- (3)HPを見て学習することを超えて、生涯学習施設〔公民館など〕に行こう。そこで、学習グループの方々と交歓して、自分たちで学習教材を作ろう。また、その活動記録を情報化しよう
- (4)講演テープの書き起こしなどは、自宅で仕事をしたいと願う在宅就労グループに提供しよう